ことば工学研究会資料
SIG-LSE-9903-S-6 (12/4)

動きとことばとデザイン

寺山 祐策、加藤 賢策、杉本 秀樹
武蔵野美術大学 視覚伝達デザイン学科

Abstract

本発表は武蔵野美術大学視覚伝達デザイン学科で近年取り組んでいる「動きとデザイン」の新しい意味を探る試みの中から、特にことばを中心としたものをまとめたものである。寺山ゼミでの学生の試みと本年7月、カーネギーメロン大学の石崎氏がムサビで1週間行ったキネティックタイポグラフィの特別授業での試みも含めて発表する。

ここでは文字が動くことによって新しい意味がどのように現われてくるか、あるいは声やワープロ、手書きなど書き手の行為と連動した時のことばの現われの関係、また人間が環境のなかを動き回ることによって得られることばの世界とはどのようなものかなどがテーマとなっている。言葉と動きの問題ではいわゆるアニメーションのように言葉が動くことばかりに注意が向けられるが、身体との双方向性や、環境を動き回るといったダイナミズムも含めて生態学的な動きとことばとデザインの問題を考えてみたいと思っている。

私たちは常に動的に活動している。時間と空間のなかで全ては変化しているといえるだろう。しかし変化する動的な状況を記述することは難しいので、私たちは便宜的に、動くものと静止したものを分けて考えてきた。デザインにおける簡単な例でいえば、紙の上に印刷された文字や街角で見かけるポスターは静止したもの、映画のタイトルバックや電光掲示板の文字は動的なものというふうに。この場合の対象物と知覚者のあいだの関係は、知覚者を便宜上固定させた場合のことか、対象物を固定化させた場合かの2種類である。この主体と客体の固定はものの観察や記述には便利なので通常私達はそのような言い方をするけれども、よく観察すれば、実際の日常の行為で経験するリアリティとは異なったものである。つまり見る対象はあらゆるものが変化しているし、見る行為は身体全体の動きの中にある。J. ギブソンによる生態学的知覚論などの指摘を取り入れることで、私たちの経験を捉えなおし、（主体と客体の固定した関係を解消した）動的でダイナミックな現象をコミュニケーションのデザインに取り入れられれば興味深いと私たちは考えている。

そこで動くことをキーワードに私たちのコミュニケーション空間を再検討してみようというのがここでの主な目的である。先に述べたように、もし動くということを対象の自律的な動きだけにに限定せずに、対象と見る人間の間に起こる動力学的な経験全体や動きの感覚まで拡張して解釈していくと従来とは異なるデザインのフィールドが広がる。そのことを考察する手だてとして、ここではとりあえずの枠組みを作り具体的なデザイン事例をみていくことにする。適切な枠組みを作ることは簡単ではないが、この発表を通してその枠組みが深化すればいいと期待している。

◆視覚 / 知覚

文字を読むという行為の中では、表意文字と表音文字など、それぞれの文字体系に内包される潜在的な動きにはどのようなものがあるか。見る行為には人間の眼球の微細な動きがある。網膜上の焦点面積は極めて限られておりそのスポットを素早く移動することによって見ている。漢字といった図像かたまりをどのように認識し理解しているのか。ゲシュタルトにおける図と地の反転において人間の内部ではなにが起こっているか。視覚における凝視、ぼかし、遮断といった動き。

> 景色を眺めるときわれわれは眼を半ば閉ざすことによって、その美しさを倍加する事ができる。肉眼は時としてものをわずかしか見ない。だが常に見過ぎているのである。
>
> ——ポオ　芸術の定義

◆組み

文字が複数に並べられると私たちはそれが縦組か横組かを認識し読むという行為を組織化する。1 文字から単語を塊としてサーチする場合。行や段落単位で行う場合。活版印刷のもたらしたものの考察。声 – 文字 – 活字 – ハイパーテキスト（デジタルタイポグラフィ）への変遷。組まれたテキストは多くの場合、（雑誌や新聞などは特に）文字の大きさや行長に差異がある。例えば 20 ポイントの見出しと 12 ポイントの本文 8 ポイントの脚注など。これは 2 次元平面上の空間である。意味の空間であるまえに小さい文字と大きい文字を見るときの無意識的な私たちの身体の構えは変化している。実際に紙面から頭部の距離を微妙に変化させたりもする。紙面というフレームは固定していても見る人間の運動によって動的な空間が立ち現われ、読まれている。意識化された距離感や文字の持つ重力空間の形成。

◆未来派やダダによる組みの破壊

読むという行為の逸脱。あるいは新たな読み、ことば、声の現出。印刷の活字の組みからの逸脱。天地左右、横組みのはずの欧文が縦に組まれることによって普段気づくことのない（安定していた動き）重力構造に異変（不安 - 定）をおこす。鎮座、転倒する文字。また紙の上の静止した動的な文字。移動や回転を暗示、示唆させる構成。

◆読むという行為

本は綴じられているので読むという行為は主として手 - うでと目 - 頭部が連動して組織化される。ページをめくるという運動。ページの変化によって物語が進行していくこと。寝て読む、立って読む、座って読むなどの振る舞い。同様に空間においては例えば街の中を歩き回る場合。身体全体の運動でもって読む。サインシステムやナヴィゲーション、看板、広告などなど。光や陰、できごとの痕跡。読みを誘発する空間。

◆文字を書く行為

筆、鉛筆、ペンなど。紙や黒板、和紙など素材からの質的なリアクション。そこに見られる動き、質感、手触り、痕跡、動きの後など経験としての質感。

◆文字自身の変化

街角で風雨にさらされたポスター、色あせたポスター、時間のなかでの変化。変幻。朝から夜までの光の変化による見えの変化。感覚的な時間の相と物理的な時間の相。

◆変換される記述行為

タイプライター、ワープロ、音声入力など変換される記述行為。

◆コンピュータによって動く文字あるいはデジタルライティングスペースのもたらすもの

重層的なグリッド。文字の表情の拡張。文字の物理的質感と視覚。動きと文字のマトリックス。漫画の噴き出し、映像と文字の新しい関係。リアクティブな色彩など。

◆地図または環境での動きをコンピュータに取り込む試み

取捨選択ではなく、情報の階層化、地と図、地図を描いて人に説明する、たどる、読みの表出、読むことが作り出す構造化。文字地図や身体感覚による地図などポリフォニックな記述。